

役場の対人援助論

(1 9)

岡崎 正明

(広島市)

番外編

～ノーベル賞とあの事件とハイエナ～

ノーベル賞

今年のノーベル医学・生理学賞に、大隅良典さん（東京工業大学栄誉教授）が選ばれた。細胞が不要なたんぱく質などを分解する「オートファジー」という仕組みの解明が評価されたのだ。

エラそうに書いているが、ニュースの受け売りである。当然だが受賞のニュースを聞いて初めて、大隅さんという方の存在も、オートファジーという名前も知った。ついでに言えば「栄誉教授」という肩書も私は初めてお目にかかった。名誉教授ならよく聞くのだが、何か違うのだろうか。いずれにしても自分には縁遠い世界だろうから、分からなくてもあまり心配はいらないが。

おめでたい話だし、受賞のインタビューに夫婦で出ておられた様子など見ると、とても好感が持てた。ただ、昨日まで全く知らないおじさんが賞をもらったことに、なぜ私たちはこんなに嬉しくなったり、身内のような親近感を覚えたりするのだろうか。知り合いでもなけりゃ、同郷でもないのに。ふと、そんな考えが浮かんだ。

おそらくそれは彼の見た目やししゃべる言葉や雰囲気、そこから感じられる文化が、私たちに「仲間」を意識させるからなんだろう。でも世界では同じ国籍でも、言語や文化が違うなんことはザラなわけで。そんな風に思考の脱線を楽しんでいると、受賞

したこと自体は本当にすごいことだし祝福したいが、それで急に「同じ日本人として誇らしい！」「すごいぞニッポン！」ってな気分になるのは、ちと違う気がした。「俺の友達パイロット！」「ご先祖様が上流階級なんで」いうのと変わらん気がするし、変な副作用のほうが気になる。

話がそれだが、大隅さんがどこかのインタビューで、基礎研究への人的・経済的投資が減っている現状をととても危惧しているとの話をされていた。今大学などの研究の世界では、成果主義の影響を受け、成功すればすぐに世の中の役に立つと思われるものや、実用的な研究でなければ補助金や予算がなかなかつかないらしい。そのことを大隅さんは以前から大変懸念していたようで、ここぞとばかりに語っておられた。

「私は『役に立つ』という言葉はとっても社会をダメにしていると思っています。科学で数年後に起業化できることと同義語みたいにして使われる『役に立つ』って言葉は、私はとっても問題があると思っています。本当に役に立つことは、10年後かも20年後かもしれないし、実をいうと100年後かもしれない。そういう社会が将来を見据えて、科学を1つの文化として認めてくれるような社会にならないかなということ強く願っています」

これまで「いち研究者のボヤキ」として見過ごされてきたものが、「ノーベル賞受賞者の金言」として世間の注目を集める。本人にとって受賞そのものと同じくらい嬉しいことなんではないだろうか。私は勝手にそんなことを感じ、ますますこの髭のおじさんが好きになった。

それと同時に、また思考の脱線が始まり、あの事件のことを思い出した。

あの事件

今年7月。相模原市にある障害者施設でおきた事件はマスコミに大きく取り上げられ、私たちに衝撃を与えた。

戦後の殺人事件として最多の19人の死者と、27人ももの負傷者を出したのだから、当然と言えば当然だ。しかしオウム事件やその他のセンセーショナルな殺人事件と違い、報道は熱を帯びるといっても、むしろ不気味な静けさをもって通り過ぎていった。それはおそらく、この事件の被害者たちが自ら語り、訴えることができない、そして家族や知人も語ったり、訴えたりすることが中々されない現実と、決して無関係でないように思う。

これだけの被害が出たにも関わらず、結局被害者の名前は匿名とされたことも、事件と障害者を取り巻く状況が、通常一般とは異なる環境に置かれていることを物語っていた。

私たちが衝撃を受けたのは死者の数はもとより、容疑者が事件前に周囲にもらしていた主張や、事件後に語ったとされる動機のほうだろう。

報道によれば「障害者の安楽死を国が認めてくれないので、自分がやるしかないと思った」「障害があって家族や周囲も不幸だと思った。事件を起こしたのは不幸を減らすため。同じように考える人もいるはずだが、自分のようには実行できない」などと

供述したという。

また、事件を起こす5ヵ月前の2月には、衆議院議長宛に以下のような手紙も出しているとのことだった。

私は障害者総勢 470 名を抹殺することができます。
常軌を逸する発言であることは重々理解しております。しかし、保護者の疲れきった表情、施設で働いている職員の生気の欠けた瞳、日本国と世界の為と思い、居ても立っても居られずに本日行動に移した次第であります。
理由は世界経済の活性化、本格的な第三次世界大戦を未然に防ぐことができるかもしれないと考えたからです。
障害者は人間としてではなく、動物として生活を過しております。車イスに一生縛られている気の毒な利用者も多く存在し、保護者が絶縁状態にあることも珍しくありません。
私の目標は重複障害者の方が家庭内での生活、及び社会的活動が極めて困難な場合、保護者の同意を得て安楽死できる世界です。
重複障害者に対する命のあり方は未だに答えが見つかっていない所だと考えました。障害者は不幸を作ることしかできません。

最初に断っておきたいが、今回この話題を扱うことには、正直迷いがあった。今も、それがまったくないとはいえない（言いたいことは山ほどあるが、言っても空虚なだけではないか。その上、自分の思いがきちんと正しく表現できるのか。そんな不安がある。しかし同時に、その反作用のように「書かずにはおけない」という何かが膨らんでいる状態）。

私は彼のことを何も知らない。生い立ちも、趣味も、家族関係も、悩んでいたことも。だからあまり推測だけでアレコレと軽率に言いたくないし、言える立場ではないと思っている。

ただ、手紙の内容やそれにまつわるエピソード・言動など、報じられている内容からは、「誇大妄想」や「関係妄想」といった言葉が浮かび、なんらかの精神疾患の存在も想像された。だがはっきりとしたことは分からないし、その症状と事件との因果関係も不明だ。少なくともこの情報量と私程度の専門性で、容易く語れるようなものでもない。

私の短い対人援助職としての経験や、少ない人生経験から想像してかろうじて分かるのは、おそらく彼が事件当時「孤独」であったということ。もちろんツイッターやフェイスブックなど、人とつながるツールは用いていたし、飲み友達はいてそれなりに遊んではいたようだ。

しかしバカ騒ぎできる知り合いはいても、彼がその苦悩やしんどさを打ち明け、相談できる人や、彼の異変に気づき、手を差し伸べる人は周囲にはいなかった。それはだけは間違いない。

どんな理由があっても、病気や障害の有る無しにせよ、起きた現実と向き合うことは避けられない。彼は自分の犯した罪を償うことになる。

それがどういう形になるかは、すでに司法制度に委ねられた。私としては、彼が少しでも心から罪を償えるようになることを、祈るくらいしかできない。事件の関係者でもないのだから、当然といえば当然だ。

だが同時にこうも思う。彼が起こした現実から逃れられないのと同様、私たち外野も、事件以前の、事件が起こっていない社会には、もう戻れない。当たり前だが、事件以後のこの社会を生きていく。そういう意味で、事件と無関係な存在ではありえないのではないか。

実際に最近仕事で訪ねた複数の高齢者施設で、セキュリティの見直しを考えているとの話を聞いた。事件が起こるまでは考えなかったことや、事件によって生まれることになった課題に、私たちは程度の差はあれそれぞれ直面し、反応し、影響を受けて暮らしていくことになる。

事件報道を見た私の最初の反応は、まさしく「恐怖」そのものだった。それは私が今まで、障害者として生きてきたことと、無関係ではないだろう。背筋に冷たいものを感じるというのは、このことなのだ実感した。だがそれは、得体の知れない未知のものに遭った感覚ではなく、「ここで、こんな形で出てしまったか」という、むしろこれまでも見知っていたものに、意外な所で出会ってしまった、驚きのようなものを含んでいた。

彼の発想そのものは、人類の歴史から見るとべつに目新しいものではない。有名なところでは彼も名前を出したという、ヒトラー率いるナチスによる障害者の大量虐殺だ。ナチスは障害者の安楽死政策を大規模に行い、20万人以上が犠牲になったともいわれている。日本でも優生保護法という法律が、つい最近の1997年まであった。この法律は不良な子孫の出生を抑制することを目的に、ハンセン病患者や知的障害者への断種や墮胎を進めることとなった。そしてこれらの政策の根本である「優生学」「優生思想」は、遡れば古代ギリシアまでその起源を求められるという。

彼の主張や優生思想を分かりやすくいえばこういうことだ。

「障害者は『失敗作』で『不良品』である。どこかが欠けていたり、一定の水準を満たしていなかったりして、社会の『役に立たない』。おまけに世話をしたり、食事を与えたりしなければならず、『手間』も『時間』も『お金』もかかる。経済的な『重荷』で、『足手まとい』な存在である。

だからより『効率のよい』社会にするため、障害者を無くしてしまったほうが良い。

そしてより『優秀』で『質の良い』人間が増えるようにした方が、社会が繁栄するはずである。その方向に社会は力を注いでいくべきである」

私たちはこの理屈に、どれだけ大きな声で「NO」がいえよう。

ひどい考え方だと思うし、間違っているとも思う。しかしこの理屈が、どこか理解できてしまう自分がある。合理的で、少なくとも論理的破綻はないと納得してしまう部分がある。そしてそう思う自分が、とてつもなく恐ろしくなる。

市場経済の社会で暮らす私たちは、普段から「効率を重視し生産性を高める」ことや、「無駄を省いて均一の出来ばえを維持する」ことは、正しいことである、良いこと

であると教えられてきた。そしてその思想は、資本主義や工場生産の場にかぎらず、自然界においてもなんとなく通じるもののような気がしている。効率的で優秀なものが、弱肉強食の生存競争を生き抜いていく。それが常識だと思っている。

だから私たちは子どもを授かれば「五体満足と健康」を祈るし、普段「働かざる者食うべからず」という言葉を使う。

作家の曾野綾子が、野田聖子の子ども（重度障害児）が高額な医療を受けていることについて、「自分の息子が、こんな高額医療を、国民の負担において受けさせてもらっていることにたいする、一抹の申し訳なさか、感謝が全くない」と批判したエピソードも含め、底に流れている考え方は共通しているように、私には思える。

そう考えると、狂気の人間が起こした特異な事件として終わらせることは、できない気がする。私たちは彼と価値観を共有する部分を持ち合わせている。それは社会に普通に存在している。

私たち自身の中に、彼の「種」は存在するのではないか。

東京大学教授で、全盲で全ろうの福島智さんは、こんなことを述べている。

「なぜ、これほど心が痛むのだろう。なぜ、これほど恐れを感じるのだろう。（中略）私たちと容疑者が、まったく無関係だとは言いきれないと、私たち自身がどこかで気づいてしまっているからではないか。容疑者は衆議院議長への手紙で、障害者を殺す理由として、「世界経済の活性化」をあげた。障害者の存在は、経済活性化を妨害するというのだ。しかしこうした考えは、私たちの社会にもありはしないか。労働力の担い手としての経済的価値で、人間の優劣が決められる。そんな社会にあっては、重度障害者の生存は軽視されがちだ。そしてほんとうは、障害のない人たちも、こうした社会を生きづらく、不安に感じているのではないか。なぜなら、障害の有無にかかわらず、労働能力が低いと評価された瞬間、社会から切り捨てられるからだ。障害者を刺し殺した容疑者のナイフは、同時に、私たち一人一人をも刺し貫いている」

「差別は許されない」「非人道的だ」。ワイドショーのコメンテーターは声高に語っていた。

しかしそんなものは、センチメンタルなヒューマニズムに過ぎないのではないか。

「優しさ」や「思いやり」は、理想ではあるかもしれないが、生存していくために不可欠なものではなく、所詮オマケなのではないか。

そんな猜疑心が、私の中で拭いきれないでいる。

彼の犯行を作り上げることに間違いなく一助をもたらしたであろう、私たちの社会の底に流れるもの。それは本当に正しいのだろうか。太刀打ちできる反論は、存在しないのだろうか。

ハイエナ

話しがまた脱線するようだが、以前 TV でハイエナの特集をやっていて、以来この不格好な動物が好きになった。

その名を聞いて、多くの人あまり良いイメージを持たないかもしれない。「狡猾」「横取り」「サバンナの掃除屋」。ライオンキングが思い浮かぶ人もいるだろう。

しかし実際のハイエナは、群れで狩りをする優秀なハンターだという。エサの6割以上は自分たちで狩りをして獲る。ちなみにライオンは、6割は他人が獲ったものを横取りするらしい。アニメとはえらい違いだ。

ハイエナは群れで生活している。メスが強い女系社会。その次が子どもで、オスの序列は1番下らしい（そのあたりに共感を抱くのも事実ではある）。

ハイエナが面白いと思うのは、群れでの序列が年を取って衰えたり、怪我をしたりしてもそうそう変わらないところ。なので足が1本使えなくなった障害者ならぬ「障害ハイエナ」も、エサの分け前を貰えて生きていけるのだという。これは自然界ではとても珍しいことらしい。中には妊娠出産までする個体もあるという。

また、ハイエナの子育ては協同で行われる。乳が出るメスは、自分の子に限らず、乳を欲しがる子どもに誰でも乳を与えるというのだ。これも他の動物にはなかなか見られない。おかげでハイエナの子どもは、子育てが下手だったり、乳の出が悪い母親でも、ちゃんと育つのだという。ハイエナの子どもが大人になれる確率は、他の野生動物と比べて高いといわれている。

その結果ハイエナは、サバンナでもっとも繁栄している（個体数が多い）肉食動物らしい。サバンナの王者は（女王といったほうがいいかもしれないが）、実はライオンではなくハイエナなのである。

脱線ついでにこんな話もある。これもTVで見た内容だが、7万年ほど前、地球は大規模な火山活動により気候変動が起こり、2年で12度も気温が下がった。それにより、当時いた人類の祖先も多くが食糧不足などで絶滅したという。

そんな厳しい環境の中で、唯一生き残ったわずかな人類のグループ。その特徴は、どんな環境にも耐えられるたくましく強靱な肉体…などではなく、意外にも「分かち合う」「分け与える」という行動だったというのだ。

サルの間には群れを作るものが多いが、エサは強い者から取っていき、弱い者はおこぼれをあさる。それが基本だ。しかし厳しい時代を生き残った人類のグループがとった戦略は、そうではなかった。群れの中の弱いもの、力のないものにも食料を分け与えた。そうすることで、群れ全体が生き残る確率を増やしたのだ。

そしてその結果が、今のこの人類社会なのだ。

現代の私たちは、他人の立場に立って涙したり、知らない人に募金をしたり、助けを求められたら手を差し伸べようとする。私たちが相手を思いやったり、弱きものを守ろうとするのは、ただの理想やセンチメンタリズムではない。DNAに刻まれた本能的なものなのだ。

ハイエナと人類の祖先。

両者の生き方から見えてくるのは、世界は短絡的な弱肉強食なんかで作られてはいないということ。そして「生命」というものは、根本的に自由で豊かな選択肢（多様性）を持つ存在なのだということだ。

競争に勝ち、己が生き残ろうとする。それも無論人間の生き物としての本性だろう。だが分かち合い、助け合っていく力も、私たちが弱き人類が、長い歴史の中で獲得した、私たちにしなやかなのだ。思いやりや優しさは、私たちの本性の一部なのだ。

これが彼の主張と私たちの社会の底に流れるものへの、今の私なりの答えであり、ささやかで堂々とした反論である。

ノーベル賞を受賞した大隅さんはこう言っていた。

「『役に立つ』という言葉はとっても社会をダメにしている」。

大隅さんは、社会が今日からせいぜいこの先10年ほどの物差しで、世の中のすべてを査定しようとする態度に、強く警告をしている。私たちが普段使う「役に立つ」が、一面的で、短絡的で、偏りやすいことに気付いている。そして「役に立つ」もの、「優秀」なものだけを大事にし、そうでないものを粗末にする社会が、自由と弾力性に欠けるもろい社会だと分かっている。

ノーベル賞受賞者が、自分と同じような答えを出していることに、少しだけニヤリとしている。